

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K14018

研究課題名(和文)スウェーデンの大学における内部質保証の研究－「フィードバックと改善」機能の解明

研究課題名(英文)A Study of Internal Quality Assurance at Universities in Sweden - Clarification of the 'Feedback and Improvement' Function

研究代表者

武 寛子 (Take, Hiroko)

名古屋大学・教育発達科学研究科・学振特別研究員(RPD)

研究者番号：60578756

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、スウェーデンの大学における教育評価が質保証枠組内でいかに制度化されているのかを考察し、授業評価の結果をフィードバックする現状と課題を明らかにすることである。本研究では、スウェーデンの高等教育庁や大学などによる文書、つまり一次資料による文献調査を主な調査手法とする。授業評価へのフィードバックについて考察する際の視点として、(1)教員への配慮があるか、(2)評価者としての学生に対するサポートはあるか、に着目した。

本研究での事例研究を通じて、大学によって授業評価の実施体制に差異があることがわかった。また、授業評価に関する学生による関与の度合いについても、大学間で相違がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、学生の意見である授業評価アンケートのデータが有効に活用されず、評価をする学生と評価を受ける教員の両方に徒労感を与えている日本の現状に対して、学生の意見を大学の教育改善に役立てるための組織的な取り組みの在り方を示唆することである。スウェーデンの大学が学生の意見を有効的に活用し、教育改善につなげている構造および課題を明らかにすることによって、日本の大学において授業評価を効果的に活用するための方途を提案する。

研究成果の概要(英文)：This study aims to examine how course evaluation in Swedish universities is institutionalised within the quality assurance framework and to identify the current situation and issues of feeding back the results of course evaluations. The main research method in this study is a literature review based on documents from the Swedish Higher Education Authority and universities. As perspectives when considering feedback on course evaluation, the focus is on (1) whether there is a consideration for teachers and (2) whether there is any support for students as assessors.

In this study, three universities were chosen as case studies, and it was found that there were differences in the implementation systems for course evaluation at each university. There are also differences between universities in the degree of engagement of students in course evaluation.

研究分野：比較教育学、高等教育論

キーワード：スウェーデン 高等教育 内部質保証 授業評価 学生の視点

## 1. 研究開始当初の背景

大学による教育の自己点検や評価の結果を、学生にフィードバックすることで内部質保証を機能させるという考え方が国内外で注目されている (Logermann and Leisytė, 2015)。内部質保証のための教育評価として、学生による授業評価がある。授業評価は、学生の意見を聞き取り、受講した学生の学修の到達度や成果をはかることが可能なことから、国内外における多くの大学で実施されている。

アメリカでは 1960 年代に授業評価が導入され、授業改善や教員評価としても使用されている。欧州では高等教育機関の教育内容の国際的な通用性と学習成果を高めるための整備が進められている中で、互換的な授業評価の在り方が検討されている (ENQA, 2006)。国内においても、国公立大学全体で約 7 割の大学で授業評価が実施されており、そのうち約 5 割の大学が授業評価の結果を教育改善につなげるための組織的な取り組みを行っている。このように国際的に教育の質保証が重要視される中、授業評価はより一層その効果的な活用が求められる。

しかし、先行研究では、評価する側の学生の性別、学習経験、講義形態などによって授業評価の結果が異なることから、その有用性や有効性が疑問視されている (Prosser and Trigwell, 1999; Ramsden, 2005)。授業評価を大学の内部質保証に活用するためには、その具体的な方途を示す必要があると考え、本研究の遂行に至った。

## 2. 研究の目的

スウェーデンは、内部質保証において学生の視点に焦点を当てることを掲げており、各大学は、授業評価などによる学生の意見をいかに教育改善に盛り込むかを重視している。大学によって内部質保証の内実が異なるため、複数の大学の授業評価制度を調査することで制度の目的や効果および運営上の問題やその影響を比較検討する。具体的には、以下の 4 点を明らかにすることが本研究の目的である。

### (1) 授業評価の実施方法、分析方法について明らかにする。

授業評価の実施時期 (学期の中期もしくは学期末) 実施方法 (紙面もしくは Web) 授業評価の質問内容について明らかにする。また、授業評価の分析を担当する組織構成、分析ツール、分析方法について明らかにする。

### (2) 授業評価の回答率を高め、教育内容の有効性を検証するための組織的取り組みを考察する。

実施方法による回答率の差、回答率を高めるための工夫について調査し、授業評価の結果をいかに教員が受け止めて授業の改善に努めているのか、その組織的な取り組みについて考察する。

### (3) 授業評価の結果を教員と学生とが議論し、教育の改善につなげる方法を明らかにする。

授業評価の分析結果を教員同士、教員と学生間で議論する場で、実際どのようなやり取りがなされ、教育改善につなげているのかについて調査し、その構造について検討する。

### (4) 日本の大学において授業評価の結果を授業改善につなげる方法について示唆を得る。

(1) (2) (3) の結果を踏まえて、日本の大学における授業評価の結果を教育改善につなげる方法を提案する。

### 3. 研究の方法

本研究を遂行するために、以下の研究手法に基づいて実施した。

#### (1) 授業評価に関する先行研究の検討

スウェーデンでは、高等教育法において、授業評価の実施が義務化されている。そこで、同国における授業評価に関する先行研究を分析し、授業評価がどのような議論を受けて制度化されたのか、その背景について精査した。特に、学生による授業評価が義務化された1960年代に遡って考察する。ルンド大学など複数の大学は授業評価の結果を公開しているため、日本で入手可能な報告書や資料を予め収集し、授業評価の実施方法、質問項目について調査した。

#### (2) 訪問調査の質問項目の検討

授業評価の結果をいかに教育改善につなげているのかを明らかにすることを目的に、十分な先行研究の検討を行った上で、翌年度に実施する調査の質問項目を検討した。質問項目は、各大学における授業評価の実施方法（紙面かWebか）、分析の際の組織体制、分析結果の活用方法について確認するための項目を設定した。

#### (3) インタビュー調査の実施

授業評価の内容、実施方法、実施後の分析、分析結果の活用方法、回答率を高めるための工夫、学生への「フィードバック」の方法について確認するためにインタビュー調査を実施した。特に、学生とどのような意見を交わし、いかに教育改善に取り入れているのか、組織的な授業評価結果の活用方法について考察した。

### 4. 研究成果

事例として取り上げた3つの大学における授業評価への対応は、以下の通りである。

#### (1) ウプサラ大学

ウプサラ大学は、2010年に授業評価ガイドラインを策定した。ガイドラインでは、学生が積極的に関わることの重要性を表明しており、学生の「Active Student Participation」を掲げている。学生は単に授業評価に回答するだけでなく、授業評価の作成にも関わっている。また、学生組合が主導して、授業評価をいかに大学で活用するかについて議論を進めている。授業評価を効果的にするための取り組みの一つとして、教員や学生向けに授業評価セミナーを開催していることが挙げられる。これは、授業評価の内容について周知を行い、理解を深めてもらうことを目的としている。セミナーの内容は、授業評価のガイドライン、形成的・総括的授業評価のメリットやデメリットについて、授業評価の結果報告書などについてである。また、授業評価そのものに対する質疑応答の時間も設けている。

授業評価は、学生の学習状況に応じた質問項目を設定し、自身の学習成果を評価するようになっている。質問項目はQuestion Bankという、質問集の中に蓄積されており、そこから授業の形態に応じた質問項目を抽出できるようになっている。例えば、授業を受講する人数に応じて質問の項目を選定することが可能である。また、Reflective Portfolioというツールを導入し、課題やエッセーなどを通じて学生が自身の学習成果を評価し、どの程度知識を身に付けることができたのかを可視化できるように工夫している。このポートフォリオを活

用することで、学生の学習履歴を記録し、学生自身のこれまでの学習を見直し、今後の学習計画や就職活動に活用することをねらいとしている。

授業評価の結果は学生にフィードバックされ、教員と学生が議論する場を設けている。議論では、教員が具体的な改善策を提示し、次回の授業に反映することが定められている。

## (2) ルンド大学

授業評価は、学生の視点から教育の質について捉えることを目的として実施している。同行において教育の質は、授業評価の結果、授業評価に関する報告書、アクション・プラン、組織計画、フォローアップ報告書、教育と質に関する会議資料、議事録、学生からの報告書などを総合的に行っている。評価に関わる学生へのサポートは、質評価室が行っている。

授業評価は、オンラインによる方法を採用している。オンラインシステムである“Sunset Survey”では、学習成果、学習プロセス、学習活動などについて記録され、さらに学生が履修した授業を評価することになっている。このSunset Surveyは、質評価室が管理運営を行っている。授業評価の結果は、メールを通じて学生と教員に通知されるようになっている。授業評価の結果を受けた後、ファカルティ・レベルで教育の質に関する会議を行う際、学生の代表者が参加することが認められている。学生の代表者と教員がプログラムの教育に関する議論を行い、教員は次の授業への改善点について提案することになっている。

学生の影響力をみるためにも、授業評価と授業評価報告書は重要だと位置づけられている。授業評価は、学生個人の学修経験を捉えられると考えており、授業評価報告書はその結果を教員と学生間とで共有し、教育を改善するために何が必要かを提示する役割があるという。

## (3) リンネ大学

リンネ大学では授業評価システムを自動化することで、大学側の授業評価実施への負担の軽減、および学生の授業評価への参画を掲げている。第三次質保証枠組を受けて、フィードバックとフォローアップを意識した授業評価を展開している。例えば、リンネ大学は2018年度より全学共通の授業評価を実施しており、その結果は自動的に集計され、学生と教員に報告されるようになっている。授業評価の回答率を高めるため、コースの最終回の授業において、パソコンや携帯電話などを通じて授業評価に回答する時間を設定することを提案している。学生が授業評価に回答すると、1週間後に集計結果が学生と教員の両方に送信される。

学生は自身のポータルサイトで授業評価の結果を確認することができる。また、授業評価の結果は、エクセル、ワード、PDF、パワーポイント、SPSSなどに変換できるシステムを登用しており、プログラム内での教育改善の資料として活用できるようになっている。学生からのコメントをみて、教員は授業改善に向けた反応を返さなければならない。教員からのフィードバックは、必須となっている。

授業評価の結果については、各プログラムの代表者と学生が今後の教育改善について議論を行うことになっている。

第三次質保証枠組では、“フィードバック”を重視しており、大学における内部質保証においても、学生が授業評価に参画することで学生の大学への影響力を高めることを意図し

ている。しかし、三大学における事例を検討すると、大学によって授業評価の実施体制に差異がある。ウプサラ大学のように独自の方法で授業方法を実施する大学もあれば、ルンド大学やリンネ大学では外部に委託して授業評価を行う大学もある。教員への配慮という点については、ウプサラ大学において授業評価実施に対する教員および学生へのセミナーを開催しており、授業評価の実施による教育改善についても提示している。リンネ大学では、授業評価実施の自動化による教員の負担軽減を掲げている。また、授業評価に関する学生による関与の度合いについても、大学間で相違がある。ウプサラ大学では、授業評価のための質問項目の作成に学生が関わっており、また、評価者としての学生へのサポートという点についても、授業評価に関するセミナーを開催したりして、学生の“アセスメント・リテラシー”の向上につながる取り組みが行われている。ルンド大学では、質評価室が、評価に関与する学生のサポートを行っている。リンネ大学では、教員から学生へのフィードバックを必須としており、授業評価に回答後、結果を早期に開示することを目指している。

スウェーデンの事例を通じて、日本における授業評価の実施体制として参考となるのは、学生を評価に参画させ、学生の視点を重視している点だと考えられる。本稿で取り上げた事例の大学では、授業評価の結果について教員と学生との間で議論することになっている。スウェーデンのヨーテボリ大学で実施された調査では、授業について学生からの意見を積極的に取り入れようとする教員の方が、学生からの意見の取り入れに消極的な教員よりも多いという(Flodén, 2017)。学生からの授業評価に前向きな教員は、教育の改善に積極的である(Flodén, 2017)ということからも、学生からの意見を重視していかに教育改善に仕組みに取り入れるかが重要だと考えられる。

#### 【参考文献】

- European Association for Quality Assurance in Higher Education. (2006). *Methodological Report Transnational European Evaluation Project II (TEEP II)*, Helsinki.
- Flodén, J. (2017). The impact of student feedback on teaching in higher education. In *Assessment & Evaluation in Higher Education*. Vol. 42, NO. 7, pp. 1054-1068.
- Logermann, F and Leisyte, L. (2015). Students as Stakeholders in the Policy Context of the European Standards and Guidelines for Quality Assurance in Higher Education Institutions. *The European Higher Education Area*. pp. 685-701.
- Linnaeus University (2018). *New Procedures for Course Evaluation*.
- Lund University (2011). *Regulations on course evaluations and course evaluation reports at Lund University*.
- Prosser, M. and Trigwell, K. (1999). *Understanding Learning and Teaching. The experience in Higher Education*. Buckingham: Society for Research into Higher Education and Open University Press.
- Ramsden, P. (2005). *Learning to Teach in Higher Education*. London: RoutledgeFalmer.
- Uppsala Universitet (2011) *Kursvärderingar och andra utbildningsutvärderingar - en del i kvalitetsarbetet* (「授業評価とその他の教育評価 質に関する取り組みの一部として」)
- Uppsala Universitet (2018) *Kvalitetsrapport 2018 - Baserad på utbildningsutvärderingar genomförda vid Uppsala universitet* (「質報告書 2018 - ウプサラ大学による教育評価に基づく」)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 田中正弘・武寛子	4. 巻 第46巻2号
2. 論文標題 学生が作成する評価報告書は質保証にどのような影響を与えているか スウェーデンとイギリスの「学生意見書」を参考に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 筑波大学教育学系論集	6. 最初と最後の頁 1 - 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武寛子	4. 巻 5月号
2. 論文標題 スウェーデンにおける新自由主義政策下の学校と「いじめ」問題への対応	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 おおさかの住民と自治	6. 最初と最後の頁 8 - 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武寛子	4. 巻 18巻
2. 論文標題 スウェーデンにおける - 大学改革と学問の自由	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北ヨーロッパ研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武寛子	4. 巻 16号
2. 論文標題 多文化共生の実現に向けた自治体の取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 53-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武寛子	4. 巻 28
2. 論文標題 「スウェーデンの大学における教育評価 - 授業評価のフィードバックによる内部質保証の考察 - 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育研究	6. 最初と最後の頁 41 - 55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武寛子	4. 巻 85
2. 論文標題 スウェーデンにおける高等教育のグローバル化と国際化政策	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 留学交流	6. 最初と最後の頁 14-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武寛子	4. 巻 第56号
2. 論文標題 スウェーデンにおける学生参画による大学教育の質保証 - 『大学への影響力をもつ学生』の形成へ向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比較教育学研究	6. 最初と最後の頁 pp.46-pp.67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Take, Hiroko and Shoraku, AI	4. 巻 Vol. 22 (1)
2. 論文標題 Universities' expectations for study-abroad programmes fostering internationalization: Educational policies	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Studies in International Education	6. 最初と最後の頁 pp. 37-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/1028315317724557	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 杉野竜美、正楽藍、武寛子	4. 巻 第8号
2. 論文標題 大学生の視点から見る海外留学・国際交流プログラムの課題 - スキルの向上から資質の昂揚に向けて -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 香川大学インターナショナルオフィスジャーナル	6. 最初と最後の頁 pp.1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 田中正弘・武寛子
2. 発表標題 学生が作成する評価報告書は内部質保証にどのような影響を与えているか スウェーデンとイギリスの「学生意見書」を参考に
3. 学会等名 日本比較教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武寛子
2. 発表標題 スウェーデンにおける - 大学改革と学問の自由
3. 学会等名 北ヨーロッパ学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武寛子
2. 発表標題 スウェーデンの大学におけるグローバル化と国際理解
3. 学会等名 日本国際理解教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武寛子
2. 発表標題 スウェーデンの大学における教育評価による質保証
3. 学会等名 日本比較教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武寛子
2. 発表標題 スウェーデンの大学における新しい内部質保証枠組に関する考察
3. 学会等名 東海教育社会学研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武寛子
2. 発表標題 スウェーデンにおける学生参画による大学教育の質保証
3. 学会等名 日本比較教育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 山内乾史編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 135
3. 書名 比較教育学の研究スキル	

1. 著者名 山内乾史編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 325
3. 書名 才能教育の国際比較	

1. 著者名 日本教育社会学会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 883
3. 書名 教育社会学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------